

第2章

事前活動

事前活動とは	16
第3回日米ユースフォーラム	16
第59回日米学生会議報告会	17
東京講演会	18
京都講演会	19
春合宿	20
英語ディベートワークショップ	24
アメリカンセンター講演会	25
横田基地訪問	25
KIPP Forum・Nano Japan	26
英語ディスカッション	
京都英語ディスカッション	26
防衛大学校訪問	27
横須賀基地訪問	28
直前合宿	28

第2章 事前活動

事前活動とは

第60回日米学生会議の事前活動は、2007年11月の第3回日米ユースフォーラムから始まった。新しい参加者が決まる前は、日米学生会議の存在を世に伝えるため、そして実行委員が運営経験を積むことを目的として行われる。参加者が決まった後は、講演会、レクチャー、コミュニケーション講座、英語ディスカッション、米軍基地訪問など多岐に渡る、本会議をより充実させるための諸活動を行う。本章では、これらの事前活動の様子を紹介する。

第3回日米ユースフォーラム

日時：2007年11月2日(金)

場所：日本外国特派員協会

共催：JASCジャパン、社団法人日米協会、日米教育委員会

後援：東芝国際交流財団

テーマ：“The Evolving Japan-U.S. Relationship: Reassessing Bilateral Security in a Multilateral, Global Framework”

パネリスト：武田尚樹(第60回日米学生会議日本側実行委員長)

Andrew Ruffin(第59回日米学生会議アメリカ側実行委員)

角田亜紗子(第59回日米学生会議日本側参加者)

Michelle Cheng(フルブライト研究生)

モデレータ：David H. Satterwhite(日米教育委員会事務局長)

講演会概要：日本外国特派員協会にて安全保障をテーマに、120名以上の来場者を迎えて、第3回日米ユースフォーラムが開催された。4人のパネリストは日米という枠組みを超えた多様なバックグラウンドの下に、それぞれの経験や大学での専攻を活かし異なる観点から発言した。

「日米同盟においてアメリカが一步引く可能性」、「被爆国・投爆国から見た安全保障へのアプローチ」、「日米同盟において日本が主体的になることの重要

性」、「各個人が日米同盟において問題意識を持つことの重要性」などの発表が各パネリストからあり、その後聴衆を交えての質疑応答の際には、パネリストと来場者との間に活発な意見交換が行われた。安全保障の分野に留まらず、環境・教育・貧困の問題に対して日米の2カ国がどのように取り組んでいけば良いのかという議論へと発展していった。

当日は高円宮妃殿下にもご臨席を賜り、英語スピーチを頂戴し、共催者団体の関係者の方々からお言葉をいただいた。

懇親会では、音楽家のメニッシュ純子氏によるJASCソングのコンサートがあり、学生と来賓の方々との懇談が行われた。



▲パネリストの4人



◀120名を数えた来場者

高円宮妃殿下との一枚▶



【実行委員後記】

本フォーラムを通して、自身の日米間の安全保障に対する認識が向上したのは言うまでもない。そして何より感銘を受けたのが、「学生の意見が多くの人への刺激になる」というレセプションの際に駐日米国公使のRon Post様からいただいたお言葉。例え専門知識はなくとも、学生の立場から率直な意見を発信していくことは決して無意味なものではなく、新鮮な意見は多くの方々に影響を与えることがある。本フォーラムで発言できたことは、日米学生会議を運営するにあたって大きなモチベーションとなった。(文責：武田尚樹)

第59回日米学生会議 ～前年度の報告及び講演会～

日時：2007年12月8日(土)

主催：国際教育振興会

基調講演：松原仁氏(衆議院議員)

場所：慶應義塾大学三田校舎 法科大学院棟 デイ
スタンスラーニング室

概要：第59回日米学生会議の内容を様々な人たちに知っていただくこと、またこのイベントを通して一人でも多くの方に応募していただくことを目的として、前年度の報告及び講演会を開催した。

はじめに日米学生会議の主催団体である国際教育振興会の大井理事長の挨拶から始まり、次に基調講演として、民主党拉致問題対策本部副部長の松原仁衆議院議員に学生間の国際交流の意義について話していただいた。一度休憩をはさんだ後、第59回参加者による本会議の総括があり、最後に第60回実行委員から本年度の会議の概要や応募要項の説明が行われた。

【実行委員後記】

日本側で日米学生会議が開催された年は、報告会を行う義務はない。また、やるとしても中心となるのは本来前回の夏に実行委員を務めた者たちである。しかし、夏が終わるとともに、そのうち3人が

海外に留学し、また別の3人が国家試験を受験予定であったため、報告会開催の有無は自然に私たち第60回実行委員の意志に託された。「第59回の報告会をやろう。」どこからともなく聞こえてくる声。私たちの想いは既に決まっていた。刺激にあふれた今年の会議を皆に伝えたい、応募者の数を増やしたい。さまざまな思惑がそこにはあっただろうが、私はそんなことよりも、もう一度あの心地良かった雰囲気に触れたい、ただそれだけの理由だった。59回の参加者に会い、空気を、そして思い出を共有し、ただ二度と戻らないあの夏を慈しみたかっただけなのかもしれない。

やることを決めるまでは良かったが、報告会の準備は他の様々な仕事と並行しての行わなければならない、正直楽ではなかった。不慣れな実行委員の仕事に戸惑ったり、報告会の会場や講演者がなかなか決まらなかったりと、例を挙げればきりがない。しかし、その度に、必ず誰かが手を貸してくれた。それは同じ実行委員であったり、アラムナイの方であったり、身近な友人であったりした。そして、決して完璧ではなく、言うなればつぎはぎのような感じであったが、なんとか12月に報告会を開催できた。

報告会后、私は確かな満足感で満たされていたと同時に、如何ともし難い虚無感も持ち合わせていた。報告会を通して第60回日米学生会議の新たな鼓動を感じられ、確かな手ごたえがあった。新しい参加者が来る。さまざまな妄想が私の脳を過ぎり、幾



▲松原氏による講演

第2章 事前活動

度も私は気持ち良くトリップしていた。また同時に、昨年度の夏の終わりも感じていた。昨年度の参加者に会い、時間と空間をともにすることでまたあの夏に戻れることを期待していた。しかし逆に、皆に会い、話を聞くことでもうそれが過去のものであることを再認識させられる破目になった。時は進む。それを皆の成長した姿から感じ取ってしまったのだ。

思いのほか早い時間の流れに戸惑いながらも、止まっていた時計の針を少しずつ現在時刻にあわせ、私は現実を受け入れた。そして、それは今年の夏を強く意識することを意味する。時間は一方向にしか進まない。いや、正確に言うとも我々が未来と呼ぶ方へ時間が進んだ時にしか脳は世界を認識できない。失ってしまったものを埋めるため、私は未来へと歩を進めることにした。満たされないままでいたくない。次こそは永遠に薄れない会議を作ろうと強く自分に誓った。

(文責：高野恭平)

者、58回実行委員を務められた山田さんからは学生会議に参加する人達の多様性の素晴らしさ、違う価値観がぶつかり合うことなどをお話していただき、同じ代の波多野さんからは分科会のお話や学生会議のアカデミックな部分についてお話していただいた。最後には55回参加者、56回実行委員長を務められた飯田さんからアメリカ大統領選挙の時に日米学生会議に参加する利点など、アメリカ開催の魅力をつぶりとお話していただいた。



◀言葉に熱の籠る塩崎氏

東京講演会

日時：2月17日(日)

場所：一橋大学

主催：第60日米学生会議実行委員会

基調講演：塩崎恭久氏(衆議院議員)

テーマ：「日米関係と人的交流」

講演会概要：塩崎恭久氏講演会「日米関係と人的交流」では、塩崎氏が高校時代、アメリカへ留学されていた時のお話や、官房長官時代、外交をするにあたって感じたこと、また今年日米学生会議でアメリカに行ったときに見てきて欲しいこと、学んできて欲しいことなどをお話していただいた。最後にはQ&Aセッションにおいて憲法9条についてなど、激しい議論があり、会場は盛り上がり熱気に包まれていた。また、これに併せて、第60回実行委員から今年開催される会議のスケジュールや応募概要など参加説明会も行った。当日は、アメリカ開催時に参加されたOB・OGの方々にご協力いただき、アメリカ開催の様子について第58回会議の様子のビデオ上映などを交えながらお話いただいた。57回参加



会場の様子▶

【実行委員後記】

朝9時半、第60回実行委員を始めOB・OGからなる講演会スタッフは、一橋大学に集合しランスルーや最終的な打ち合わせなどを行いました。準備段階では58回会議の様子を収めたビデオが再生できないなど、テクニカルな面でトラブルがありながらも、無事13時過ぎに開会することができました。OB・OGの皆様、休日にもかかわらずお仕事でお忙しい中駆けつけて素敵なスピーチをしていただき、本当にありがとうございました。

第60回参加説明会が終了に近づき、塩崎様が地方でのお仕事を終え、羽田空港から国立まで予定通りご到着されるとお電話がありお迎えにあがりました。裏話ですが、講演会の前半は飛行機が遅れていないか、渋滞に巻き込まれていないかなど不安でし

たが、予定通りご到着され、安心いたしました。塩崎様、お忙しい中日米学生会議のためにお時間を割いていただき、また大変貴重なお話をありがとうございました。

最後の懇親会も大変多くのご来場者が残られ、会議に関する質問にお答えさせていただきました。テクニカルな話だけでなく、会議の苦労話や楽しかった思い出などについても聞かれ、去年の会議を振り返ることができ、私自身も楽しませてもらいました。

まだ寒さが厳しい時期、会場まで足を運んでいた方々、講演会にご協力していただいた全ての皆様にこの場をお借りして改めて実行委員一同心より御礼申し上げます。(文責：渡辺恭子)

京都講演会

日時：2008年2月4日(月)

主催：第60回日米学生会議実行委員会

講演：村田晃嗣氏(同志社大学法学部教授)

テーマ：「日米関係：今後の日本がとるべき行動」

講演会概要：村田晃嗣氏講演会「日米関係：今後の日本がとるべき行動」では、現在注目を浴びている米国の大統領選挙、そして日米朝関係並びに日米中関係について独自の視点で分かり易く、具体例も交えながら講演をしていただいた。日米学生会議に参加するに当たり、このような3カ国間関係の重要性は忘れてはいけないとご指摘いただいた。また、日々変化の激しい政治の世界を逐次追っていくためには、新聞が公表する「1週間予定表」を自分の手帳に記録しておくことで、様々な事象の裏側が鮮明に見えてくる、といったことも教えていただいた。日本が今後取るべき行動としては、技術・環境・公衆衛生に関して世界の中で発言力を高めていくべきであると主張されていた。

講演終了後は、2人の第59回会議の参加者による5分間のスピーチと、第60回会議概要を詳細に説明し、関西方面への日米学生会議の浸透という目的を果たすことができた。

【実行委員後記】

今日は待ちに待った講演会の日。実行委員として一人京都に取り残されてしまい、丹念に今日の講演会のために色々な媒体(インターネット、口コミ、携帯)を通して宣伝を行ってきた。最終的には40人の学生の皆さんに来場していただいた。興奮のあまり、実行委員同士との事前の準備は怠ってしまったが、やはり本番には強いのだろうか?実行委員と手伝いに来てもらった第59回参加者のみんなは機敏に与えられた仕事を全うしてくれた。

本日の前半は講演会である。関西系のテレビでは連日顔を見かける「有名教授」の村田晃嗣氏は、経済学部の私にとっても明瞭かつ簡潔に様々な政治的事象を説明してくださった。時折混ぜる冗談や雑学で学生の興味を引き、大変有意義な時間を過ごせたと感じている。複雑かつグローバルに動く政治の世界を上手く分析するには、幅広い見識と情報が必要であることを思い知らされた。「日米中」関係といえども、具体的な事象や歴史的視点も必要になるからである。改めて、自分の知見が不十分であることを実感させられた。質疑応答でも活発な議論がされたことは、学生に村田氏の議論が正確に伝授されていた証拠であろう。前半の1時間はあっという間に終了した。

後半は、第59回会議参加者によるスピーチと第60回会議の概要説明を行った。京都大学農学部の吉川真由さんと立命館大学大学院の土岐吉史さんは、明瞭な、そしてパッションに溢れたスピーチで来場者に会議のアピールをしてくれた。そして、遙々東京と岐阜から来てくれた武田実行委員長と高野実行委員により、関西では到底通用しない漫才ネタを混ぜながら、第60回会議の概要と魅力を伝えてもらった。試験期間前のお忙しい中、多くの大学から来場して下さった学生の皆さん、そして講演会場の施設提供をしていただいた京都大学国際交流センター所長の森純一教授には、この場を借りて御礼申し上げます。(文責：伊関之雄)

第2章 事前活動



◀59回参加者のスピーチ



講演会に聞き入る来場者▶



▲講演中のアラムナイの方々



◀熱心に質問する参加者

春合宿

5月4日～5月6日にかけて、代々木のオリンピックセンターにて第60回日米学生会議参加者が初めて一堂に会する春合宿が開催された。2泊3日という短い期間の中で、自己紹介、アイスブレイキング、先輩方による講演会、異文化コミュニケーション講座、CIEE生や早稲田のSILS生との英語ディスカッション、アラムナイの方々を招いたレセプション、そして分科会活動やプレゼンテーションなど、盛りだくさんの内容であった。参加者は寝る間を惜しんで親交を深めると共に、英語の練習や分科会の議論にも明け暮れ、本会議に向けて幸先の良いスタートを切ることができた。

〇OB講演会

戦後すぐの第8回会議に参加された岩崎洋一郎氏と、第42回実行委員長の金井隆氏をお招きし、講演会を行った。岩崎氏からはJASCの歴史や若者へのメッセージを中心に、金井氏には本会議という1ヵ月が人生にどのようなインパクトを与えるかというテーマに沿ってお話いただいた。

【参加者後記】

アラムナイの方々築き上げてきたJASCの歴史の流れの中に身を置けることに、緊張と嬉しさで一杯になった。JASCの歴史について少ししか知らなかった私にとって、アラムナイの方々のJASCの歴史に関する話は目から鱗であった。特に、戦後すぐに会議を復活させようと奔走した、第8回参加者である岩崎洋一郎さんの日米関係への熱い思いに胸を打たれた。また同時に、多くの困難を乗り越えてJASCを築いたアラムナイの方々のご尽力に恥じない第60回参加者に、自分になれるだろうかと身が引き締まった。そして、激励会では岩崎さんと席が近かったため、アメリカという国、今までのお仕事についてなど貴重なお話を聞かせていただいた。その際、私の稚拙な質問に対して、寛大に接していただけて嬉しかった。

アラムナイ講演を通し、私の働きが、今までのアラムナイの方々の姿と重なるよう、JASCを通し世界をよりよいものになりたいと強く思った。

(高畑乃枝)

○ディナーレセプション「ようこそ先輩」

様々な年代の日米学生会議参加者・実行委員の方々を招いて、立食パーティーを行なうのが本企画の概要である。第60回の理念は今までの日米学生会議を再考すること。そのためのとっておきの情報源が、実際に過去の会議にご参加された先輩方の体験談である。合計で40数名の先輩方に参加していただき、会の後半には小さなグループになって各人が個人的にアドバイスをいただくなど、有意義な3時間を過ごす事ができた。(伊関之雄)



▲先輩方を囲んで

○Communication Workshop

講師：Vital Japan小田康之氏

Vital Japanより小田康之氏をお招きし、夏に1か月間アメリカで過ごす参加者のためにコミュニケーションワークショップが開催された。文化圏によりコミュニケーションに対する考え方が異なり、日本はハイコンテキスト(文脈を読む、または主語を省くなど)な文化であるのに対し、アメリカはローコンテキストな文化であるので、その差に気をつけながら議論を進めると良いというアドバイスをいただいた。他にも、対人関係を築く上での第一印象の重要性を教わり、初対面での挨拶の仕方や、握手の意味などを習い、夏に向けてのかなり有意義なワークショップであった。Vital JapanのURLは(<http://vitaljapan.com/>)。(廣田隆介)

○English Discussion Session×CIEE&SILS

このセッションは多くの参加者にとって、日米学生会議に入ってから自分の英語スピーキングを試す最初の機会だった。CIEE&SILSの留学生たちは、黒色人種/黄色人種/白色人種と、多様な背景を持つ人たちで、皆ネイティブだったために非常に良い交流相手となった。全員が集まるとJASCの学生は留学生たちにアプローチし、Communication Workshopで学んだ西洋式自己紹介(握手)を実践する事が出来た。後に、留学生はそれぞれ興味のある分科会に混ざり、JASCerと分科会ごとに話し合いをした。後に立食パーティーを行い、ここでは必死に学術的な事を話そうと奮闘するジャパデリもいれば、留学生との共通の趣味を発見し話し込む人や、後のリフレクションで自分は一言も話せなかったと反省する人もいた。いずれにせよ、一人一人のジャパデリにとって、英語コミュニケーションに対するモチベーションを高める良い機会になった。

(神馬光滋)



▲懇親会スタート

○分科会発表

春合宿のトリの行事として、各分科会が3日間で行った話し合った成果を発表し合うセッションを設けた。初日から始まった議論をまとめて、他の分科会メンバーの前で発表することで本会議までに行なう議論の修正や反省点を考えられる絶好のチャンスである。各分科会は、あまり時間が足りない中でプレゼンテーションを作成して独自性のある発表を行い、

第2章 事前活動

それらに対して他の分科会参加者からは鋭い質問が飛び交い、我々実行委員が時間の関係上泣く泣く止めなければならない程の熱のこもったセッションとなった。

(伊関之雄)



▲プレゼンテーションの一幕

○春合宿に参加して

3日間の春合宿は、Life Changing Experienceの序章だったように思われる。

初日の朝、皆スーツを着ながら、日米学生会議の起源、歴史、今後のあり方の展望、そしてOBの方々による講演を聞いた。すなわち、日米学生会議の「理念」、コアバリューを真剣に吸収するプログラムである。そこで、大きく感じたのは、我々が背負っている責任であった。象徴的なのが、色々なニュースで取り上げられていた「ジャパン・パッシング」である。日本の政治的・経済的な国際的地位が、徐々に影響力を失ってきているため、アメリカを始めとする先進諸国は、日本よりも中国の方に目を向けているというニュースである。こういった影響もあり、第60回日米学生会議では、「発信」「行動」「挑戦」などがテーマとして上げられており、自分も日米学生会議の一員として、この目標に達するための責任を果たしていこうと改めて決心した。

一方で、初日の後半では、日米学生会議で、実際に何を行なうかの説明を受け、日本側・アメリカ側のExecutive Committeeのビデオ紹介なども見て、理念から生まれてくる日米学生会議の雰囲気や文

化、そしてこれから自分が1ヵ月アメリカで過ごしていくだろうことを想像して、身震いがしたほどでもあった。

2日目からは、60回参加者がメインに行なう「Communication Workshop」や「English discussion」「Round Table Discussion」などが行われた。ここでは、実際に仲間とコミュニケーションしながら、1つの方向性に向かっていくプロセスを実感できたと共に、今後1ヵ月一緒にいることができたら、どのようなことを学べるのだろうかということも考えたりした。夜には打ち上げもあり、食事を交えながら、色々と日米学生会議にかける意気込みや、今後どのような会議を作っていきたいかという、カジュアルな話をする中で、さらにお互いの距離が縮んでいったように感じた。

そして、最終日、皆のRound Tableでどのようなことをしていくかという発表があり、その後にリフレクションが行なわれた。皆が真剣に発表し、厳しい質問を投げかけ、涙を流している人もいて、最も時間が早く流れ、充実した時間だったと思う。

この春合宿を通じて一番良いと思ったことは、日米学生会議には遠慮しないで、本音で議論するといった文化があることである。そのために、特有のジェスチャーがあり、質疑応答時間があり、色々と話し合う時間が設けられているのだろう。今後の事前活動、そしてアメリカで過ごす1ヵ月が本当に楽しみになった。

(油井英孝)

○参加者による一言感想

・たった3日間だったにも関わらず、内容が濃く、充実した合宿でした。他の参加者と予想以上に仲良くなることができたとし、RTでの話し合いの時間もすっかりあったし、それ以外のOBやOGや留学生などと知り合うことができ、本当に知ること、学ぶことが多い3日間でした。

(明石恵美子)

・“J” u実した3日間、疲れた眠い…でも夢中!

“A” ツイ議論、もっと勉強します!

“S” uテキな皆に興味津々!

“C” oれから楽しみ!

縦も横も熱く固く結びついたJASCerになれて良

かった。皆からの刺激を元に問題意識を持って、私も発信していきます☆ (居鶴有未恵)

・この春合宿で感じたのは、ジャスカー一人一人の個性の強さでした！(笑)初日から熱く語り始めたり、ぶっとんだ自己紹介したり、マフィアがいたり、と皆の個性を掘り下げただけでも、1ヵ月は必要だなと思いました笑 (伊藤昂介)

・多くの人からの刺激にのみ込まれ、思いやりに包み込まれた3日間。素敵な出会いに感謝して、浮き彫りになった自分の課題に取り組みたい。(小野 元)

・春合宿が終わって、「プチJASCシンドローム」を患っている。ジャパデリ36人全員が魅力溢れ、話しても話しても話題は尽きない。早く来て欲しい本会議。終わって欲しくない60th JASC。(金光慶紘)

・JASCでの議論は面白かったし、OBや勉強会から新しい何かを吸収するのは楽しかった。JASCの持つ“人”という財産を感じとることができた。これから、もっとJASCの持つ可能性を引き出していきたい。(後藤昌也)

・国際交流を通じて視野を広げたい、が応募理由でしたが、早くも春合宿だけでこれまでの人生で最も世界が広がった気がします。JASC恐るべし。こんなにもエネルギー溢れる個性的な面々と知り合えたことに感謝です。(坂本朋美)

・まさにJASCの幕開けにふさわしい春合宿だった。JASCの先輩方の熱い思いや、JEC・AECの60回への意気込みに刺激され、分科会の議論の中で新たな自分を発見し、これから私にしかねない真のJASCerになりたいと思いを新たにしたい。(新宮清香)

・合宿参加者全員の第一印象が良かったわけではない。ところが、その第一印象はすぐに塗り替えられた。みんな、「うまい」。そして、本質的に「良い」。切磋琢磨し合えるレベルに成長しようと思った春合宿であった。(神馬光滋)

・私たち実行委員にとって春合宿は特別なイベント。もしかしたら本会議よりも輝かしいものであったかもしれない。不安が少し入り混じる、しかしそれでいて希望に満ち溢れる瞳たち。絶対本会議を成功させようと固く誓った日になった。(高野恭平)

・冷静さを装っていたつもりだけど、私の心の中は

最高潮でした。初めて会った人とでも、こんなに熱くなれる自分、そしてみんなを見つけたからー！

(高畑乃枝)

・他のメンバーの第一印象は、おとなしい&マジメだった。しかし、外国からの留学生との英語討論がひとたび始まれば、みんなの顔に生気が宿り、立て板に水のごとく英語を使いこなす。この会議の真髄に触れた瞬間だと思った。(田中 豪)

・長かった広報活動、そして選考が終わり、ついに待ちに待った春合宿。広報担当だった私は、この日を夢に見ながら、実行委員の仕事をしてきた。参加者の期待を裏切らないよう、今後も全力投球で本会議準備に臨みたい。(竹内菜緒)

・OBとの交流や講演を通してJASC参加者としての自分を意識し、モチベーションがあがった。英語ディベートやセミナーなど実践面も充実していて、何を課題に取り組んだらいいのか考える機会にも恵まれたと思う。(中村玲奈)

・全体的に充実した内容の濃いイベントでした。フールツバスケットや他己紹介による打ち解け、OBやOGを交えたレセプションでのJASCに参加していると言う自覚、留学生とのトークイベントでのRTの方向性の模索などこれからのJASCを盛り上げるきっかけとなったイベントでした。(比嘉慎一郎)

・合宿終了後、家に帰ってほっとすると何故か一気に涙が出た。3日間緊張し続け、メンバーからも強い刺激を受け、正直圧倒されっぱなしだった。JASCの重みを感じた、忘れられない春合宿だった。

(廣瀬祥子)

・「何かすごいことが起こるかもしれない」という、上手く言葉では表現できない予感が生まれた春合宿。こんなに人との距離が縮まって、こんなに色々な感情が押し寄せた2泊3日は初めてだったかもしれません。(菅田有里)

・「8ヵ月間の努力は全てこの日のためにあったのだ」と、感慨深い60回デリとの出会い。本会議が本当に楽しみである一方、ここから時間の流れが一気に加速すると思うと、何だか寂しい複雑な心持です。

(廣田隆介)

・濃い3日間だった。素晴らしい仲間と出会い、同時に、

第2章 事前活動

彼らに刺激され自分の知らなかった自分にも向き合う事もできた。この仲間たちと一緒に米国で過ごす1ヵ月、どんな事が起こるか楽しみだ。

(松本秀也)

・就職活動終了後、入社までの1年間の予定を立てていたが、JASCの春合宿から帰ってきて、その予定をとりあえずすべて白紙にした。JASCにひと夏かけてみようと思った。

(盛島正人)

・春合宿は、少しの緊張と大きな期待で始まりました。真剣な討論、楽しい会話を通じて、素敵な仲間と出会ったという実感とともに「夏が待ちきれない」「自分の何かが変わる」とさらに大きな期待でいっぱいです。

(安川瑛美)

・春合宿では、日米学生会議の過去・現在を多く学んだ。日米学生会議が開始された時の理念、60年経った今でも受け継がれているものと変化したもの。今後、どんな未来を創っていけるのかを想像すると楽しみである。

(油井英孝)

・日米学生会議で自分に何ができるのか、分科会はどうなっていくのか、皆とどんな風にこれから過ごしていけるのか。日米学生会議のスタートを体感し、胸の高鳴りを感じながらも、一方で戸惑っている自分がいた。

(横山雄一)

・開会挨拶があっても、「始まり」を実感できなかつた。しかし、分科会での議論や全体プログラムを通して、自分の胸中を語り意見を言い合う中でいつの間にか今度は終わりが来る事をすでに寂しく思っていた。

(渡辺恭子)

・ワークショップで習ったPREP方式で！

P全員から情熱を感じ、刺激的な合宿！

R皆が意見を持っている&周りの意見を素直に受け入れる！

E分科会では時間を忘れ議論！

P皆、情熱的！

今は本会議が待ち遠しい！

(渡辺千尋)

・心から自分を成長させたい。そう願ったなら、自分を育ててくれる他人に正直な自分をあらわすこと。そこにホンモノの出会いがある。これが、私が春合宿で一番感じたことだ。

(渡邊ともね)

英語ディベートワークショップ

日時：2008年5月10日(土)

場所：ココデシカ

講師：井上敏之氏



▲井上氏を囲んで

【参加者後記】

JASCのOBの井上敏之さんによる英語ディベート講習には、20人を超える参加者が集まった。井上さんはまず、参加者一人一人に講習の目的を聞き、日本語と英語を切り替えながら、ディベートの基礎から教えてくれた。

はじめに、1対1でのスピーチ練習では、PREP（結論・理由・例示・結論）を意識して、論理的な話し方を実践的に学んだ。続いて、「日本は小学校から英語教育を行うべきか」などについて、1対1のディベート練習を行った。

講習の最後は、4人1チームによるディベート対戦。テーマに対して賛成・反対に分かれ、それぞれ4人が基本的な主張、その補強、相手への反論、結論と役割を分担した。みな、講習で学んだ話し方をさっそく取り入れ、1分の時間制限に追われながら、チームの勝利を目指し、活発な議論を展開した。ユーモアにあふれ、説得力のある参加者の姿から、本会議までいかにどのような力が必要か考えられたと思う。

(小野元)

(井上敏之氏のウェブサイトは、

<http://www.speech-debate.com/>)

アメリカンセンター講演会

日時：2008年5月15日(木)

場所：東京アメリカンセンター

講演：Sangmin Lee氏(在日米国大使館 安全保障政策課 課長補佐)、Kevin Olbrysh氏(東京アメリカンセンター副館長)

テーマ：「アジア系アメリカ人の政府における役割」



▲講師のお二人を囲んで

【参加者後記】

外交官の方とのセッション…「外交官」と聞くと、私には遠い存在であり“外交官らしく”どこか距離を置いたディスカッションの様子を想像していた。経歴を拝見すると、在韓米国大使館での滞在期間には北朝鮮の核問題を担当なさるなど、まさに最前線で活躍されている方を前に緊張は高まる。しかし、そんな緊張は不必要だと分かるのに長くはかからなかった。プレゼンテーションはアジア系アメリカ人とアメリカ社会の関係について、人口比に対するアジア系アメリカ人の社会的成功率の高さという現状の説明から始まり、その一方で直面するアメリカ人・アジア人両者から板挟みのジレンマ、アイデンティティー問題、アフターマティブ・アクションの是非といった社会的な話をしてくださった。私自身がマイノリティと多文化社会分科会所属なため、始終興味深いお話が聞けてとても有意義な時間であった。またさらに、結婚と文化の関係について実体験を交えたお話など身近で素朴な疑問にも答えてくだ

さり、結婚において異文化間でどのような違いが生まれるかなどJASCerみんなの人生の先輩としてのアドバイスも、私たちの今後に大いに役立つだろう。
(安川瑛美)

横田基地訪問

日時：2008年6月6日(金)

場所：横田米軍基地

概要：JASCのOBでもあり、日米協会の会員でもある山本東生氏のご協力により、日本側デリゲート有志で横田基地を訪問した。日米学生会議の必須テーマである「世界平和」について、安全保障の側面から考える良い機会となった。



◀ 広報将校を囲んで



基地内のテレビ局にて▶

【参加者後記】

久しぶりの晴天の中、日本側参加者で横田基地を訪れた。福生駅から車で10分ほどのところに、突如「アメリカ」が現れた。東京ドーム150個分もの広大な敷地を持ち、基地内には至る所に星条旗がはためき、学校や教会、スーパーマーケットなどが並ぶ横田基地は、さながらアメリカの都市を丸ごと移送させたようだった。横田基地に到着して最初に放送局を訪れ、基地内での放送内容などについて説明を受けた。次に、広報部長のお話と質疑応答を経て若手米兵と昼食を共にした。自分と同世代の若者が一兵

第2章 事前活動

士として日本に駐留しているという事実は日本人の私にとって幾分不思議に感じられた。その後、横田基地についての概要説明を聞き、最後に大きな基地内をバスで巡回し、基地を後にした。

戦後の日本の国防は米軍なしには語ることはできない。それにも関わらず、今まで私にとって米軍とその基地は遠い存在でしかなかった。今回、それを実際に目にする機会を得ることができて良かったと思う。基地の説明を受け、米兵と実際に話すことで、「米軍基地」という鉄条網の中の住人でしかなかった彼らの存在意義を改めて考え直し、評価し直すきっかけになった。これからもこのように市民と米軍が交流し、お互いについて考える機会が増えれば良いと思う。米兵の犯罪や、日米地位協定、「思いやり予算」など、日米関係に関して見直すべき点は沢山ある。冷戦は終結し、世界の構造は変化を遂げ、日本は世界有数の軍事大国となった。私たちは改めて、日本憲法9条、これからの日本の国防や米軍との付き合い方を真剣に考えてゆく必要があるだろう。(明石恵美子)

KIPP Forum・Nano Japan 英語ディスカッション

日時:2008年5月12日(月)、5月22日(木)、5月29日(木)、
6月4日(水)

会場:国際文化会館、さぬき倶楽部

概要:パッカード啓子氏のご厚意により、各界の第一線で活躍されている方々から生のお話を伺うKIPP Forumと、科学専攻のアメリカ人学生たちとの英語ディスカッションに、日米学生会議参加者もご招待いただいた。KIPP Forum初回では、朝日新聞主幹論説員の若宮啓文氏に日本政治の現状についてご講演いただき、その後学生の意見に対して丁寧に一問一答して下さった。Nano Japanは5月中旬にアメリカ人学生が来日したのを皮切りに、彼らの集中研修が終わる6月初めまでディスカッションを重ねた。

【参加者後記】

Nano Japanとは、アメリカで科学を勉強している学生が日本に短期間留学するためのプログラムである。彼らと5月から6月にかけて3回の議論と総括を行い、日米での教育制度の違い・地球温暖化・民主主義というテーマを扱った。

議論を通してその分野の複数の視点を知ることができた上に、議論の進め方の違いについても見えてきた。日本の参加者は自分の意見を綺麗にまとめてから話そうとするのに対して、アメリカの参加者はとりあえず自分の意見を述べてみるが多かった。大風呂敷を広げてみる議論のスタイルの方が、新たな意見を吸収しやすく、成長の機会が大きいに思えたので、今後試してみたい。

学ぶことが多かっただけでなく、ここから新たな交流関係も生まれた。麻布十番で、一緒にご飯を食べたことは良い思い出である。アメリカでの本会議1ヵ月に向けて弾みとなるだけでなく、自分を成長させ、新たな友人と出会うことが出来た貴重な機会だった。(大井あゆみ)



◀フェアウェルパーティの様子

京都英語ディスカッション

日時:2008年6月14日(土)

場所:京都キャンパスプラザ

講師:ダーニング舞子シャンドラ氏

東京での英語ディベートワークショップに参加できない関西JAScerの要望に応え、赤ちゃん同伴で通えるママさん英会話教室を開いているダーニング舞子シャンドラさんを講師に迎えての英語ディスカッション講座が京都で行われた。講座は簡単な自



▲ディスカッションの様子

己紹介を済ませた後、プレゼンテーション→フィードバック→ディスカッション→反省会という流れであった。参加者は関西在住のJASCer3名+京大生1名と少数だったため各人の発言する機会が多く、充実した1時間となった。

【参加者後記】

初めての英語ディスカッション講座に対する緊張は、JASCerとの久々の再会と、私と同年代のシャンドラさんの丁寧な指導のおかげですぐに解けた。自己紹介を兼ねたアイスブレイキングの後、早速「私のホームタウン」についてのプレゼンテーションを開始した。シャンドラさんは特に形式などは示さず、各自のスタイルで発表するよう促した。そこで参加者は故郷の自慢や嫌いな点、「そもそもホームタウンはどこか」を論じるなど自由に思いを述べた。発表後は各自が互いの発表について長所・短所を指摘しあうフィードバックが行われ、自分の話法を改善するよい機会となった。次に3対3に分かれてのディベート。お題は「バナナとリンゴ、どっちがいい？」である。今回は相手を言い負かすのではなく、相手の意見を尊重しつつ自分の主張を展開する「Friendly Debate」が重視された。ここでは相手を納得させる論理展開に加え、相手を引きつけるためのアイコンタクトやジェスチャーの重要性も学んだ。これらは本会議でよりよいディスカッションを行う大きな助けとなるだろう。(坂本朋美)

(ダーニング舞子シャンドラ氏のウェブサイトは、
<http://www.chandrababyenglish.com>)

防衛大学校訪問

日時：2008年6月27日(金)

会場：防衛大学校

概要：防衛大学校側のご厚意により、授業日にもかかわらず毎年日米学生会議は防衛大学校を訪問し、学生との交流を重ねている。普段中々意見を交わすことのできない防大生と意見を交わし、将来の国防を担う彼らの責任感の強さに自らを戒めながらも、我々と何ら変わらない青年らしさも持ち合わせる彼らとの交流の素晴らしさは、日米学生会議をまたここに引きつける原因にもなっているのだろう。

◀防大生の優しい
エスコート



日防学生会議序章▶

【参加者後記】

人間は、想像を許された生物だ。故に、僕は脳みその中で、数少ない情報を用いて、対象の印象を作り上げてしまうことがある。そして、ホンモノに直面したときに、そのギャップに驚かされるのだ。僕は、防衛大学校研修において、まさにそのような経験をした。現実には存在する防衛大学校生は、僕の脳みその中の彼らよりも、「多様性」を兼ね備え、「聡

第2章 事前活動

明」であり、僕らと同じように「日本のことを想い」、何より「大学生」だった。防衛大の全校生徒に囲まれそわそわしながら食べた昼食、「環境と戦争」についての熱い議論、互いの健闘を称えこれからの門出に乾かした瓶ビールという名の杯、、全てが一生の思い出となった。僕は今この感想文を、アメリカに向かう飛行機の中で書いている。これから始まる会議への期待が高まる一方、その成果を早く防衛大学の学生に伝えたいと思う。そのためにも頑張ろう。そして秋には東京の居酒屋で、日防学生会議だ!!

(仁平理斗)

横須賀基地訪問

日時：2008年6月28日(土)

会場：米軍横須賀基地

概要：OBでもあり、日米協会の会員でもある山本東生氏に再びご協力をいただき、横須賀米軍基地を訪問した。2年連続の訪問、そして前夜からの基地内宿泊を許可していただくなど、在日米軍横須賀基地の皆様には格別のご高配を賜り、この場を借りて御礼申し上げたい。

駆逐艦上で▶



◀山本氏とウィード司令官

【参加者後記】

横須賀基地内はあちこちで英語が飛び交い、建物は全て高さが低く横に長い構造であり、道路は広く、朝ご飯を食べたマクドナルドではドル表記で日本にはないメニュー項目があるなど、本会議前でありながら既にアメリカに来てしまったようだった。米国のために貢献する軍人の方々が母国にいる時と同じような気持ちで、同じような生活が出来るように配慮しているとのことだったが、そこに流れる空気まで忠実に再現しているようで、感激した。

まず係の方の誘導のもと基地内見学をさせて頂いたが、ヘリコプターの消火訓練の様子や、イージス艦内部のミサイル中央操作室の見学までさせて頂けるなど、基地のオープンな雰囲気には驚いた。日米が同盟関係にあるとはいえ、防衛に関することであるためもっと閉鎖的であるに違いないと思っていた私にとって、とても新鮮だった。

また、横須賀基地司令官のキャプテン・ウィードより日米同盟についてご講演をいただいた。質疑応答で中国の台頭を受けての日米関係の今後の趣向についてなど気になる事を遠慮なく次々と質問していると、一緒に昼食を食べていた若い米軍人のPaulに、“You ask such difficult questions!”と言われてしまった。しかしウィード司令官はとても丁寧な全ての質問に答えてくださり、日本をいかに自分が気に入っているか、日米の同盟がいかに強固なものであるか、そしてこれからも米国が日本の、そして日本が米国の一番の同盟国であり続けることがいかに重要であるかということなどを説明してくださった。ウィード司令官のおっしゃる通り、これからも日米両国の友好と固い絆が存在し続ける事を願う。

横須賀基地訪問研修は、日米関係や米国の安全保障についての知識と理解を深め、双方間の対話を実現できたという意味で、大変有意義な経験だった。

(竹内友理)

直前合宿

コーディネーター：高野恭平・竹内菜緒

直前合宿スケジュール

- 7月26日(土) 直前合宿オリエンテーション
本会議のスケジュール確認
スキット練習
サイトスタッフミーティング
- 7月27日(日) スキット練習
スペシャルトピックス
フォーラム概要説明
サプライズプロジェクト(花火)
- 7月28日(月) リフレクション
成田空港により出発(機内泊)

直前合宿の概要

参加者同士の絆を深める時間を意識し、直前なのであまり疲れないプログラムにするため、本年度から直前合宿を2泊3日にしようと考えた。直前合宿では、本会議に違和感なく入っていけるように本会議をイメージできるようなプログラムを多く組んだ。また、事前活動の参加率による温度差を減らし今抱える悩み不安などを共有できる場を設けることで参加者のコミュニケーションの活性化を図った。

7月26日 日本側直前合宿1日目

いよいよ直前合宿の日。昼を過ぎたころ、大きなスーツケースを引きながら東京大学検見川セミナーハウスに日本側参加者が集合した。はじめに実行委員から直前合宿に関する諸注意やスケジュールの確認などが行われた。その後、息つく間もなく、スキット(異文化紹介の寸劇)の練習や、これからの本会議の軸となる分科会の日本側最終準備をおこなった。

【参加者日記】

1ヵ月に及ぶ本会議に備えた大きなスーツケースと期待を抱き、千葉のセミナーハウスに到着。ジャパデリとの久々の再会にはしゃぎながらも、直前合宿が始まった。各サイトのスケジュールを確認して

ゆく中で、これから始まる本会議が現実味を帯びてゆくを感じた。長い歴史を誇るJASCの一員であるという事実とまだ見ぬアメデリとの出会いに期待と緊張、不安が高まっていった。スケジュール確認後は、ポートランドで発表するスキットをグループに分かれて考えた。10分ほどの短い時間内のスキットにも関わらず、日米のユーモアの違いに配慮しつつも、日本文化を反映させ、日本特有の事柄を英語で説明することが難儀であることを悟る。その後、分科会の時間に今まで学んできたことを確認し合い、夕食の時間に至る。上げ膳や片付けを協力しながらやり、スキットの練習に深夜まで取り組む中で、どことなく皆の中に一体感が生まれてきた気がした。(明石恵美子)

7月27日 日本側直前合宿2日目

この日は、まず分科会の時間を設け、アメリカに渡る前の最後の詰めを行った。その後、本会議の最新のスケジュールや各地で行われるフォーラムの詳細を実行委員が発表した。一度昼休憩をはさんだ後は、スキット練習やスペシャルトピックスなどを行った。夜にはリフレクションを行い、渡米直前に皆で不安を共有し合った。また、直前合宿の締めとして、実行委員からのサプライズ企画である花火を行い、夜遅くまで語り合った。

【参加者日記】

27日は本会議の前日であった。久しぶりにJASCerの皆と食べる朝食、試験の直後でかなり疲れていそうに見える顔もちらほら見える。けれども、久々にみんなと一緒だという感じがなかなか良く、明日は出国だという期待で落ち着かないながらさわやかである。朝食後は分科会タイム。それぞれどれだけ進んだのかチェックし合い、分科会によってはだいたい扱うテーマや方向性も決まっていて安心する姿も見える。昼食の後はスキットについて話し合う時間。みんな素晴らしいアイデアを出してくる。さすがと思いつつ自分はどうなキャラで行くべきかを真剣に迷い始める。その後はスペシャルトピックス。テーマはカルチャーショックだったはずなのに、気づいたら国際恋愛につ

第2章 事前活動



▲出発前夜

いて盛り上がっていた。そして最後に花火大会。楽しみながらも、明日からアメリカ行くのをやっと実感し始め、妙な気持ちになった。今日も一瞬で眠れそうと思いつつ部屋に戻った。
(李 鎮河)

7月28日 直前合宿最終日・出発日

午前中はこれから1ヵ月間に渡る本会議の意気込みを全員がひとりひとり発表した。その後、バスで成田空港まで移動し、15時35分に予定通りNW航空の便にてアメリカへ向かった。

【参加者日記】

ついに出発の朝。選考の合格通知を受け取ったときの「感動」、そのときから感じた「責任」と「不安」、それらの下での「ついに」の日なのに、待ちこがれた日であり過ぎて、実感を持って無かった。日本で最後のreflection。慌しさや混乱を整理して自分と向き合える時間であり、そこで感じたことを仲間と共有できるこの時間が、すごく好きである。特にこの日は、出発前に一人一人の意気込みを確認しあう貴重な時間となった。私の目標は、「聴き役」から「聴かせ役」になること。普段から自分の考えを明確に伝えることに苦労している上に、言葉の壁がある本会議で満足のいく意見交換ができるか。正直なところ不安ばかり感じていたけれど、JASCの仲間と3日間合宿をする中で、意欲が不安を打ち消した。delegate発案のおそろいミサンガを腕に付け、いざ出発！！最後に、ECの緻密な準備や配慮につくづく感謝。本会議中は一人のJASC構成員として自覚



◀いざ出発！



ドキドキの成田空港▶

を持って臨みたい。

(居鶴有未恵)

【参加者後記】

久しぶりに皆で顔を合わせての直前合宿。ここでは、主に現地でのフォーラムや日程の通知、アメリカ到着後2日目に行われるスキットの練習に当てられた。1日目はRTとスキットの打ち合わせ、2日目はRTとスキット、スペシャルトピックスやサブライズの花火「大会」が行われた。我々のRTでは、現地でのサイト説明や、メンバーによるRTに向けたプレゼンなどが行われた。皆本番に向けて、気合が感じられたのと、自分も含め物怖じせず意見を言える雰囲気があった。現地でアメリカの学生と議論する際もこの心構えを保てると良いと感じた。スキットの打ち合わせでは、普段RTなどが違うメンバーとグループで話し合う機会がもて、非常に楽しかった。スペシャルトピックスでは、中国に関する議論を、他のRTの人達と話すことが出来て、非常に面白かった。直前合宿は、全体的にリラックスした雰囲気、皆との交流も沢山することができ、直前の準備段階としてはとても良かった。OBの方たちが訪れてくれるなど、JASCの魅力を感じる事ができた。アメリカでの本会議が楽しみである。

(松本秀也)